

グローバル化と経済の大変動のなかで、地域経済がどのようにして自己革新し活性化していくか？——地域経済活性化のためには、問題の根源に迫る理論的確な現状分析、大胆かつ緻密な戦略・戦術が必要であり、地域の「知」のセンターである大学の責務は重い。大学の地域貢献・地域連携といえば、とすれば理系学部の問題と考えられがちだったが、今日のような転換期においては、経済学部はじめ文系学部にも活躍が大いに求められる。前号につづき、地域経済活性化において大学が果たすべき役割、今後の方向をさぐる。



特定非営利活動法人
起業ネットかなざわ 理事長/
山内会計事務所 税理士
山内 司

起業教育と大学

1、地方の大学の果たす役割

地方の大学はその地域の文化と経済の基盤となっている。近年、地方分権・地域主権の機運が高まり、地域の自律化を図るため、さまざまな施策が模索されているが、大学等の高等教育機関の持つポテンシャルにも注目すべきである。

大学等の高度教育機関は、その地域の活性化に資するばかりではなく、住民の生活の質の向上にもつながる。地域活性化や地域への貢献という観点からは、①地域政策のシンクタンク機能、②地域経済界との協働、③地域住民の学習ニーズへの対応、④地域が抱える特定の課題への取り組み、などが考えられる。

特に④のように、地元の抱える課題に積極的に関与して、課題解決に貢献したときに、本当の意味での大学と地域との一体化が達成され、それがまた大学自体の発展につながると言える。

現在の地域経済の課題として全国共通して挙げられるのは、中央への依存体質からの脱却である。雇用や産業育成面において、地域独自の取り組みがなされなければならない。地域性を活かした、特色ある新しいビジネスの誕生支援という点で、大学の果たすべき役割は大きい。地域経済に貢献

する人材の苗床として、大学は起業家育成という面を充実させてみてはどうだろうか。

2、アメリカの起業家育成

アメリカの90年代からの経済的な復活は、大学を中心とした起業家育成の充実がひとつの要因と言われている。新しくビジネスをはじめするにはまず「アイディア」がないといけない。このアイディア創出の中心をなしているのが大学なのである。アメリカの新ビジネスの流れのなかでは大学が大きな役割を果たしており、産学協働が恒常的に実践されている。一説によると現在のアメリカにおいて起こりつつある新しいビジネスの50%くらいは何らかの形で大学と関係しているという。

大学を中心とする起業家輩出の土壌は、アメリカの雇用情勢に大きく貢献している。年間90万社に及ぶ新規開業によって雇用増加の8割が吸収されているのだ。

またアメリカの大学は研究・教育だけでなく、公共サービスが目的に掲げられ、その社会的貢献を通じて公的な富の集積が図られていることも注目に値する。

3、多くの人に必要な起業教育

起業教育は、実際に起業する人にしか役に立たないものではない。広範囲のビジネス全般に応用できるものである。一般企業の勤め人、公務員など、起業するつもりがない人が起業教育を受けても意味がないように思われるが、そうではない。起業教育は、一人の人間としてしっかりと自立して生きていくための知恵と自信をもつことに重点

を置いているからである。

近年の企業を取り巻く環境の変化により、企業の求める人材像は、自分の裁量で新しいことにチャレンジするような人材である。自分の仕事は自分で作らなければならない。もはや給料は天から降ってくるものではない。自分の給料は自分でかき集めてこなければならない。形の上ではサラリーマンであっても、必要とされるのはアントレプレナーシップ（起業家精神）なのである。

義務教育、高等教育を含め、日本の教育においては、経済教育に関して非常に臆病である。子どもや若者がお金を勘定することを覚えることに嫌悪感すら抱いているのではないか。起業教育にしても、経済教育にしても、金儲けの方法を教えるのではない。将来にわたって自立して生きていくための知識と勇気を与えることであり、それも教育の使命のひとつのほうである。

経済教育を経験しないまま純粋培養されたほとんどの日本人は、学卒後、社会に出て初めて、自立して生きていくことの難しさを知り、また組織の中で自分をアピールすることの困難さを実感し、戸惑い、ある人は自身の将来に絶望する。

従来の日本社会は、面倒見のよい‘カイシャ’というものが、学校が教えてくれなかった、一人の人間として生きていくための自立術を、時間とお金をかけて教え込んできた。しかし、今はそんな優しいカイシャはもう、無い。思いやりのある上司もいない。終身雇用という考え方は廃れた。カイシャも上司も、自身の生き残りに必死で、入社してくる若者にかまっていられない。そんな暇もお金も余裕もないのである。

4、これからの大学像

これからの大学では、専門職大学院がさらに真剣に検討されていくであろう。専門職大学院は、文系ホワイトカラーの知的生産性の向上に役立ち、知識産業化による地域づくりにもつながる。これから訪れる知識社会においては、知的産業が最大の産業になる。また、従来の会社という組織形態

にとらわれない、知的自由業もますます増えていくだろう。大学という高度教育機関は最適な苗床となるはずである。

もちろん大学の使命として研究者養成面の充実も忘れてはいけない。大切なことは、総花的にならず、地域ニーズに応じ、その大学の強みを活かすこと—経営戦略における選択と集中—である。しかし、一般企業の経営戦略と違い、教育であるから、短期的な視野で成果が出ないからといって、安易な内部資源の切捨てを行ってはいけない。事前の慎重な理念構築を行うことが大切である。「誰に、何を、どのように教育するのか」という基本的な枠組みをしっかりと設計し、大学側だけの論理で教育制度を描くのではなく、教育サービスを受ける側の論理を併せ持たなければならない。同時に、地域ニーズに沿った、産学連携での人材育成を心がけたほうが良い。

大学は社会的存在であり、地域に欠かせない社会的共通資本であり、社会的安定度、文化的成熟度をあらわすものである。大学に限らず学校教育全般に言えることであるが、地域から幅広い資本を集めて、地域ニーズにあった教育方針に基づき、地域ガバナンスのもとで個性的な教育を貫く学校経営の方法も模索すべきである。市民側も行政や学校側に任せきりにしないで、市民が自らの社会的投資責任として、社会性ある投資で教育を築くという姿勢を持つべきではないだろうか。

5、最後に

締めくくりとして、NPO法人として起業支援業務を行ってきた経験から感じたことを述べよう。社会人を対象に起業に関するセミナー等を開催すると痛感するのは、勤務経験のある社会人であっても、自己表現をたいへん苦手とし、人前で自分の意見を述べることを避けようとすることである。ましてや、他人の意見を汲み取った上で自分の主張との妥協点を見い出したり、意見の違う複数の他者をうまくコーディネートすることなど、到底望めない。これらのスキルはビジネスを成功させ

ていく上で、いや、自立してこの厳しい社会を生き抜いていく上で、必要不可欠なはずである。

プレゼンテーションスキル、ディベートスキルは早い段階で身につけたほうがいい。社会に出るからでは遅い。学生のときに経験と自信を持つべきである。大学レベルでやるのはどうかとは思いますが。本来は義務教育レベルでやるべきだ。

もう一つ、社会人経験を経て金沢大学に籍をお

いた私自身の経験から言えること。大学はビジネスの宝の山である。しかし、それに気付いている人はほとんどいないような気がする。大半の人は宝を見過ごしたまま卒業・修了しているのではないか。ビジネスのネタという意味ではない。人間が誇りを持って豊かに生きていく上で、必要なアイデアがたくさん埋まっているのだ。角間の山には。



佃食品株式会社
代表取締役社長

佃 一 成

金沢のまちづくりと大学

都市は、まず安全で快適でなければならない。都市は楽しく賑わいのある空間でなければならないし、何よりも個性的でなければ都市とはいえない。

都市の個性の核心は、文化であり、歴史、伝統である。

金沢は、文化のまち、歴史と伝統のまちとして全国的、世界的に知られる。人に人格があるように都市には都市格があるが、金沢には高い都市格がそなわっている。

しかし、金沢の市民や行政が文化・伝統の価値を重視するというとき、それは美術や工芸、すなわち物に対象化された文化・伝統に偏しているように思えてならない。

都市が人を育てる

私は、金沢はもっと芸能の普及、発展に力を入れなければならないと考えている。ヨーロッパの主な都市は、必ずその中心に立派なオペラハウスやコンサートホールを有しており、市民が日常的に気軽に演劇や音楽を鑑賞することができる。金

沢を名実ともに国際的文化都市とするために、私はかねてから、浅野川演舞場(仮称)の早期設置をよびかけている。

工芸とならんで、あるいはそれ以上に、生身の人間に担われ鑑賞者に直接つたえられる文化、伝統が重要だと思うのである。社会病理的な犯罪が増加傾向をみせるなど、都市が病みつつある今日、人との直接の対面でしか得ることのできない他者への共感や自己に対する深い洞察の能力こそ、もっとも大切にされるべきなのである。

また、楽器や道具、衣装の製造をはじめとする芸術関連産業の発展は、都市経済を量的にも質的にも豊かなものにしてくれる。

現在の金沢が大学を都市の外に出してしまい、学生が都市の文化や生活に接する機会を提供していないことを憂えている。私が金大生だった頃(1962年卒業)、キャンパスは金沢城内にあり、学生の下宿もまちなかにあった。講義が終われば喫茶店や居酒屋で、学生同士の、学生と教師との人間的なふれあいがあった。学生は特別なこととしてではなく、普通に学生生活を送っていれば自然とまちの人々のくらしと営業に日々接することができたのだ。現在の学生の多くは、下宿、大学、バイト先といった点を線で結んだ生活をしているが、私たちの時代、学生は金沢の「面」で生活していたのである。

都市での面的生活は、とくに文系の学生にとって、生きた学問の土台づくりになる。まちづくりに学生の創意が生まれる。「いい街で学生生活を